

横田英史の 書籍紹介コーナー



人工知能のアーキテクトたち ～AIを築き上げた人々が語るその真実～

マーチン・フォード、松尾豊・監修、
水原文・訳
オライリージャパン 3,520円(税込)

AIの最前線に立つ23人の研究者・起業家へのインタビューを集めた書。これ以上はないと思える面子が勢揃いしている。650ページを超える大著だが、エキサイティングな上に非常に読みやすい。AIの過去、現在、未来を知ることができる良書で、時間とお金を使って読み通す価値がある。

インタビュアーは未来学者で、高い見識を背景にして鋭いツッコミを入れる。インタビューとのやり取りの緊張感は本書の読みどころの一つである。

筆者は全員にほぼ同じ質問を投げかける。汎用人工知能(AGI)は可能か、いつ誕生するか、AIにおける次のブレークスルーは何か、中国は脅威か、などである。「近ごろのニュースとして報じられているものは、概念のブレークスルーではなく単なるデモ」「チープなハックにすぎない」といった「AI冬の時代」の再来を予言するコメントも登場する。

未来を実装する ～テクノロジーで社会を変革する 4つの原則～

馬田隆明
英治出版 2,420円(税込)

デジタル技術を企業や社会に実装する上での要諦をまとめた書。Uberやマ

ネーフワード、加古川市の見守りカメラなどの事例を示しながら議論を展開しており、理解を助けてくれる。DX推進に携わる方にお薦めである。

デジタル技術の社会実装を成功に導くポイントを4つ挙げる。①社会に対してインパクトと道筋を提示すること、②リスクに対処すること、③ガバナンスを適切に変更すること、③関係者が腹落ちするセンスメーカーを行うこと、である。とりわけインパクトを志向することが成功に導く第一歩だとする。

筆者は、社会(企業)の変え方のイノベーションが重要だと説く。テクノロジーの「社会(企業)への実装」ではなく、「社会(企業)との実装」がポイントとなる。社会(企業)がうまく変わらなければ、テクノロジーをうまく受容できないという訳だ。

アジャイル開発とスクラム 第2版 ～顧客・技術・経営をつなぐ協調的 ソフトウェア開発マネジメント～

平鍋健児、野中郁次郎、及部敬雄
翔泳社 2,200円(税込)

ソフトウェア開発手法「アジャイル」と、アジャイル開発の1手法「スクラム」についての解説書の第2版。ソフトウェア開発だけではなく、企業経営や組織マネジメントなどにも言及する。アジャイル開発とはなにか、なぜアジャイル開発なのか、といった基本的な部分から具体的に説き起こしており理解しやすい。

事例としてはNTTコムウェア、ANAシステムズ、IMAGICA Lab.、KDDIを取り上

げる。内容が第1版から大幅にアップデートされているので、初版を読んだ方にもお薦め。ユーザー企業の経営者やシステム部門、ITのベンダーのマネジャーに向く。

第3部は「イノベーションのキッカケはPDCAのPから始めてはいけない。Socializaitonが出发点」「場を作って共感、共振、共鳴するプロセスが重要」「イノベーションは真剣で熱い思いを実現すること」など警句に溢れる。

DX経営図鑑

金澤一央、DX Navigator 編集部
アルク 2,310円(税込)

米国を中心に日本・欧州・中国など32社のDX事例を紹介した書。NetflixやWalmart、Teslaといったメジャー企業のほか、小売、飲食、輸送、金融といった業界別にスタートアップ企業を取り上げる。日本企業で登場するのはワークマン、ブリヂストン、クボタである。「これがDX?」と思える事例もあるが、海外企業の事例が多く勉強になる。

顧客体験からみた「ペイン(苦痛)」と「ゲイン(利得)」に分けて各社を分析する。事例としては、スマホを使った業務プロセスのトランスフォーメーションが多い。図を多用した分析は分かりやすい。事例からDXを学びたい方向に向く。

注目したいのはリアル店舗とスマホを組み合わせた事例である。ECサイトのリアルのショールームを代行するb8ta(ベータと読む)のビジネスモデルや試行錯誤を重ねたWalmartの事例は興味深い。

横田 英史 (yokota@et-lab.biz)

1956年大阪生まれ。1980年京都大学工学部電気工学科卒。1982年京都大学工学研究科修了。川崎重工業技術開発本部でのエンジニア経験を経て、1986年日経マクロウヒル(現日経BP社)に入社。日経エレクトロニクス記者、同副編集長、BizIT(現xTECH)編集長を経て、2001年11月日経コンピュータ編集長に就任。2003年3月発行人を兼務。2004年11月、日経バイト発行人兼編集長。その後、日経BP社執行役員を経て、2013年1月、日経BPコンサルティング取締役、2016年日経BPソリューションズ代表取締役就任。2018年3月退任。2018年4月から日経BP社に戻り、日経BP総合研究所 グリーンテックラボ 主席研究員、2018年10月退社。2018年11月ETラボ代表、2019年6月当協会理事、現在に至る。

記者時代の専門分野は、コンピュータ・アーキテクチャ、コンピュータ・ハードウェア、OS、ハードディスク装置、組み込み制御、知的財産権、環境問題など。

*本書評の内容は横田個人の意見であり、所属する団体の見解とは関係がありません。

